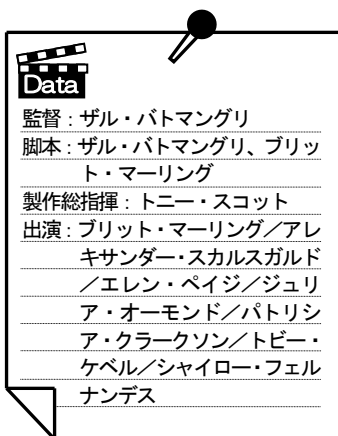




👁️👁️ みどころ

主演・製作・脚本を務める新時代の女性クリエイター、ブリット・マーリングが、何とも斬新な環境テロリスト集団、イーストの物語を『インファナル・アフェア』3部作とは一味も二味も違う、潜入捜査の難しさと醍醐味をタップリと。

「予定調和」が目立つ邦画とは大違いの、「予測不能な展開」に興奮！そして、「驚愕が爽快に変わるラスト」に注目！

ブリット・マーリングに対抗できる日本の才女は、つい先日ロッテルダム国際映画祭の審査員への就任が決まった杉野希妃ただ一人・・・？

———— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— *

■□■サンダンス映画祭からは、次々と新しい才能が！■□■

1978年にロバート・レッドフォードが創設したサンダンス映画祭は、次々と新しい才能を生み出している。そのサンダンス映画祭で、2本の映画に主演・製作・共同脚本したことで大いに注目されたのが、今回私がはじめて知った1982年生まれの美女ブリット・マーリング。そんなブリット・マーリングが多くの若い才能とタッグを組み、自身が主演・脚本・製作した作品が本作だ。ちなみに、彼らの才能をバックアップするプロデューサー陣の中には、巨匠リドリー・スコットも名を連ねているらしい。

他方、これも私がはじめて知ったのは「一人一人の心に残る映画、誰かに語りたくなる映画、いつも新鮮な刺激を与えられる映画・・・一言で言えば、個性的で他では観られない“オンリーワン”な作品を届けるブランド」として立ちあげ、「過去19年間で20個のアカデミー賞を受賞（81ノミネート）、この9年間で9回も作品賞にノミネートされている、文字通り“最もアカデミー賞に近い”スタジオ」になっているFOXサーチライトが、

2014年に創立20周年を迎えるにあたってプロジェクトを発進し、第2弾作品として公開したのが本作だ。

タイトルの『ザ・イースト』だけでは何のことかサッパリわからないが、これは環境テロリスト集団の名前らしい。そして、本作の主人公は元FBIエージェントのジェーン（ブリット・マーリング）。ジェーンは今、シャロン（パトリシア・クラークソン）が率いるテロ活動からクライアント企業を守る会社ヒラー・ブルードに勤めていたが、今回命じられた任務は「イースト」への潜入捜査だ。イントロダクションには「張り巡らされた伏線、予測不能な展開、驚愕が爽快に変わるラスト 全米が息をのんだエッジ・サスペンス！」と書かれているから、その展開に興味津々。サンダンス映画祭から、次々と生み出される新しい才能に注目！

■□■こんなカルトもあんなカルトも。さて本作のカルトは？■□■

日本では19年前に起きたオウム真理教による目黒公証役場事務長拉致事件で逮捕監禁罪等に問われた、元教団幹部・平田信被告に対する「裁判員による裁判」が1月16日に東京地裁で始まった。「地下鉄サリン事件」を引き起こしたオウム真理教団は、日本では最悪のカルト集団だ。ちなみに、園子温監督の『愛のむきだし』（09年）は、「ゼロ教会」という怪しげな新興宗教団体を描いていた（『シネマルーム22』276頁参照）が、さてアメリカのカルト集団は？

ハリウッド映画では、『ザ・マスター』（12年）が「ザ・コーズ」というカルト集団を



『ザ・イースト』 (C)2014 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.
DVD発売中 20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン

描いていた（『シネマルーム30』213頁参照）し、本作と同じくサンダンス映画祭で監督賞を受賞した、『マーサ、あるいはマーシー・メイ』（11年）は、山の中の農場で共同生活を営むカルト集団を描いていた（『シネマルーム30』218頁参照）。しかし、本作でジェーンが潜入捜査を命じられた環境テロリスト集団、イーストとは？

冒頭に映し出されるのは、全身を石油で汚されてしまったペリカンの姿。これは2010年4月のメキシコ湾原油流出事件によって生じた何とも痛ましい姿だ。マイケル・ムーア監督は『キャピタリズム 〜マネーは踊る〜』（09年）（『シネマルーム24』93頁参照）等でアメリカの資本主義に対して強烈な問題提起を続けているが、こんな大事件を引き起こす大企業に対しても、何らかの制裁が必要だ。しかし、本作導入部の展開を見ると、イーストは公害をたれ流す悪徳企業に対して明確な「制裁」を加えることを目的としているカルト集団らしい。「罪を犯した者には、犠牲者と同じ恐怖を味わわせる」と犯行声明を発表したり、「世界的な悪徳企業3社に、今後半年間で制裁を加える」と予告している姿を見ると、その思想はかなり過激そうだが・・・？

■□■潜入は困難？それとも意外に簡単？■□■

警察官のマフィアへの潜入捜査と、逆にマフィアから警察組織への潜入を壮大なスケールで描いた『インファナル・アフェア』3部作（03年、04年、05年）は大人気となり（『シネマルーム5』333頁、336頁、『シネマルーム17』48頁参照）、ハリウッドでも『ディパーテッド』（07年）としてリメイクされた（『シネマルーム14』57頁参照）。そんな組織VS組織の威信を賭けた「潜入モノ」に比べると、本作はあくまで民間企業に雇われた元FBI捜査員ジェーンによるカルト集団への潜入と情報収集だから、その規模は小さい。しかし、イーストというカルト集団の本拠地がどこにあるのか？日常的にどんな活動をしているのか？等々についての情報が何もない中、ジェーンは一体どうやってイーストに潜入するの？

『愛のむきだし』に見た「ゼロ教会」は、立派な教会を持った巨大な組織だったが、『マーサ、あるいはマーシー・メイ』に見たカルト集団は、山の中で共同生活を営んでいるだけの小さな存在だった。ジェーンは髪を金髪に染め、バックパックを提げ、名前もアリゾナから来た旅人サラに変えてピッツバーグを目指したが、それはアナーキストやゴミを回収して再利用するフリーガンの若者たちから得た乏しい情報にもとづくもの。したがって、サラがこの先どうやってイーストの本拠地にたどり着き、どうやってその組織の中に潜入するのか前半の焦点となる。

その点について偶然の連続が多い展開が少し不満だが、共に無賃乗車した列車の中で知り合い、共に警察の拘束から逃げ出した青年ルカ（シャイロー・フェルナンデス）の車の中に、イーストのトレードマークらしきものを見つけたサラは、とっさの機転で自分の腕を傷つけるという荒ワザに。この傷の治療が必要だと考えれば、ルカはきっと自分をイーストの本拠地に連れて行ってくれるはず。サラはそう考えたわけだが、さてその後の展開は？

本作がサンダンス映画祭で絶賛された理由の一つは、ブリット・マーリングのこのよう

なアイデアをふんだんに盛りこんだ脚本のおかげだ。なるほど、なるほど……。当初、私の目にはイーストへの潜入は困難と見えたが、現実の展開を見ていると、意外に簡単……。？

■□■イーストに見る、このけったいな食事風景は一体ナニ？■□■

私は昨年12月21日に開かれた西天満連合の忘年会で、すぐ近くに巨大なビルを所有している「幸福の科学」に所属している若い女性3人と親しく対話し、大川隆法総裁の教えを聞くことができた。彼女たちの話を聞く限り、その「修行」は普通の生活の延長だが、外部との接触を断ってサティアンに籠り、麻原彰晃こと松本智津夫と同じ「浮遊」を目指していたオウム真理教の信者たちの修行ぶりは異常だった。しかし、ルカの善意によって潜入を成功させたサラが、目のあたりにしたイーストの共同生活ぶりとは？

精神病院では患者が暴れ回るのを防止するために「拘束服」を着せることがあるが、イーストでは食事の時に全員がこの拘束服を着るらしい。しかし、それは一体なぜ？ また、拘束服のまま、一体どうやってスープを飲んだり食事するの？ 「まず、新入りから食べるように」と言われたサラは、仕方なく口でスープの皿を近くに引き寄せ、犬のように舌で舐めたが、それをあざ笑うかのようにイーストのメンバーたちが見せた、同じ拘束服のままのあざやかな食事風景とは？

それは本作を観てのお楽しみだが、たしかにそこには「なるほど、互いを思いやるとはこういうことか!」と納得させるものがある。もっとも、メンバーのそんな姿を見てサラ



『ザ・イースト』 (C)2014 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.
DVD発売中 20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン

が、「私はバカにされているのか!」と落ち込んだのは当然。しかし、少しずつイーストのメンバーたちとの共同生活に馴染んでいくと、今や拾ってきたゴミの中からリンゴや野菜を探し出して食べるのは当たり前になってきたから立派なものだ。さらに、イーストのリーダーであるベンジー（アレクサンダー・スカルスガルド）と呼ばれる長身の男は決して威圧的な姿勢とはらず、常にもの静かだが、その中にも他を圧するオーラにあふれていた。こりゃヘタすると、サラはそんなベンジーに対して、リーダーとしての魅力だけではなく、男としての魅力も・・・？

■□■第1の標的となる製薬会社への制裁は？■□■

日本で発生した大規模かつ深刻な薬害事件としては、サリドマイド事件と森永ヒ素ミルク中毒事件が挙げられる。また、近時は降圧剤として広く使用されていたディオバン（一般名バルサルタン）をめぐる、その臨床試験データが改ざんされていたことが大きな社会問題になった。しかして、イーストが世界的な悪徳企業3社として最初に狙いをつけたのは、製薬会社のマッケープ・グレイだ。

同社のCEO宅では今日、兵士への新薬の支給を祝うパーティーが開催されていた。その会場に正装し招待客を装って乗り込もうとしているのが、リーダーのベンジーとサラの腕の治療してくれたドク（トビー・ケベル）、そして何かと新規闖入者のサラに対して警戒心を示す若い女性イジー（エレン・ページ）だが、イーストはそこで一体何をやろうとしているの？イジーはもちろんリーダーのベンジーも、サラをその「襲撃」に参加させるつもりはなかったが、メンバーの一人が脱落したため、どうしてもサラのアシストが必要に。そこで、ベンジーはすべての情報を提供しないまま、「見張り」役だけをサラに命じたが、メンバーたちの動きを見てパーティーの参加者が乾杯するシャンパングラスの中に、「何か」を混入させようとしていることをサラが見抜いたのは、さすが元FBIのエージェントの勘だ。これはヤバイ。そう判断したサラは危険を冒してシャロンに電話したが、シャロンは「マッケープ・グレイは顧客じゃない!」とつれない返事。なるほど、企業の経営者としては、そういう割り切り方もあるわけだ。

ベンジー以下、イーストのメンバーたちは、「襲撃」の成功を祝いながら車で帰路についていたが、数日後マッケープ・グレイの副社長ページ（ジュリア・オーモンド）が、「私はピンピンしている」と記者会見したから、アレレ……。すると、あの乾杯のグラスの中に混入した「毒物」は量不足だったの？それとも、マッケープ・グレイ社の製品自体にホントに毒物は含まれていなかったの・・・？

■□■人間模様、恋愛模様の展開は？そして、第3の標的は？■□■

降圧剤ディオバンの例を見れば、いくら大手の製薬会社がつくる薬でも副作用の危険があることがわかるが、マッケープ・グレイ社が兵士向けに開発した新薬は、マラリア予防に何の副作用もなく絶大な効用を発揮するもの。マッケープ・グレイ社はそう宣伝していたから、それが真実なら、その液を混入したシャンパンを飲んでも身体には何の異常も起きないはず。現に副社長のページはテレビで「私はピンピンしている」と豪語していたか

ら、ドクの妹がマラリア予防のためにその薬を飲んだことによって脳に障害を起こし自殺したというのは、根拠のない言いがかり・・・？私たちのみならず、パーティーへの「襲撃」を仕掛け、見事に成功させたイーストのメンバーたちもそう思わざるをえなかった。その結果、イーストは「一時解散」を余儀なくされたが、実はその後ページの健康状態は・・・？

そんな状況下、ベンジーが定めた第2の標的は毒物をたれ流しているホークストーン鉱業だが、その「襲撃」ではマッケーブ・グレイ社への「襲撃」以上に「罪を犯した者には、犠牲者と同じ恐怖を味わわせる」というイーストの基本哲学が鮮明になっていく。また、そこではイジーがホークストーン鉱業の社長の娘であったことが明かされるなど、ストーリーは深みを増していく。したがって、本作中盤はそのような人間模様の展開、さらにはベンジーとサラとのあつと驚く恋模様の展開が見どころになるので、それに注目したい。

ヒラー・ブルード社に出勤する元FBIエージェントのジェーンは、颯爽とスーツを着こなした行動的な女性だが、ベンジーたちと共に山の中のアジトで暮らすサラは漁ってきたゴミの中からの食料を平気で食べる、今やれっきとしたイーストのメンバー。そんな「二面性」に誰よりもとまどっているのは当の本人だが、このような人間模様、恋愛模様が展開する中、あつと驚く次なる第3の制裁のターゲットは・・・？

■□■「驚愕が爽快に変わるラスト」をしっかりと！■□■

お正月映画として見た『武士の献立』（13年）は、製作委員会方式による「予定調和」の映画だったから、ごく一部の例外を除いてストーリーが読めるものだった。しかし、新時代の女性クリエイターであるブリット・マーリングが主演・製作・共同脚本を務めた本作は、次々と「予測不能展開」になるうえ、「驚愕が爽快に変わるラスト」らしい。そう思いながら観ていると、ベンジーが最後の標的と定めたのは、何とサラが勤務しているヒラー・ブルード社だと言うからビックリ！一体ベンジーは、何のためにヒラー・ブルード社を標的に？また、そうだとすると、ベンジーはひょっとしてサラがヒラー・ブルード社のエージェントとしてイーストに潜入していたことを知っていたの？

『JUNO/ジュノ』（07年）で思いがけず妊娠したティーンエイジャーを見事に演じ、若くしてアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたエレン・ペイジ（『シネマルーム19』294頁参照）は、本作のイジー役でもそれなりに好演しているが、やはり本作で圧倒的な存在感を示すのは1982年生まれ的美女で才女のブリット・マーリング。今やイーストの「教義」を信奉するとともに、恋人のような存在になってしまったベンジーと共に「第3の標的」に向かって行動を起こしたサラだったが、その標的がヒラー・ブルード社だとわかると、さてそこでのサラの選択は？もちろん、ベンジーの側に立てばジェーンとしてのこれまでのキャリアをすべて台無しにしてしまうこと明らかなが、そうかと言って目の前にいるベンジーを裏切ってヒラー・ブルード社の側に立つことができるの・・・？ヒラー・ブルード社から要請されているのは任務の遂行だが、サラの目に今やはっきり明らかになっているのは、イーストが目指すのは「正義」だということだ。

『マーサ、あるいはマーシー・メイ』と同じようにかなり難解だが、本作最大の「売り

文句」とされている、「驚愕が爽快に変わるラスト」かどうかは、あなた自身の目でじっくりと。

2014（平成26年）1月18日記



『ザ・イースト』 DVD発売中
20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン
(C) 2014 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.